

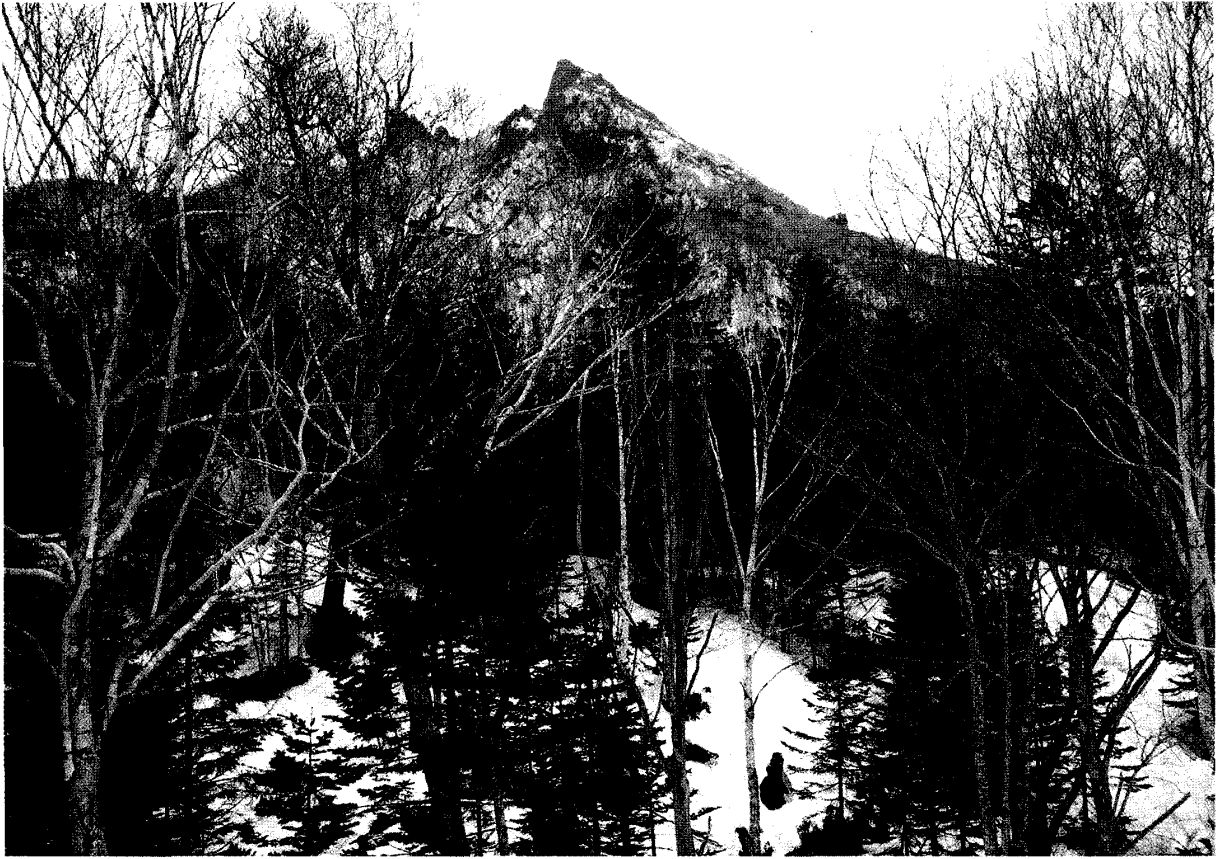
## 冬の終わりから春へ、そして夏へ (写真)

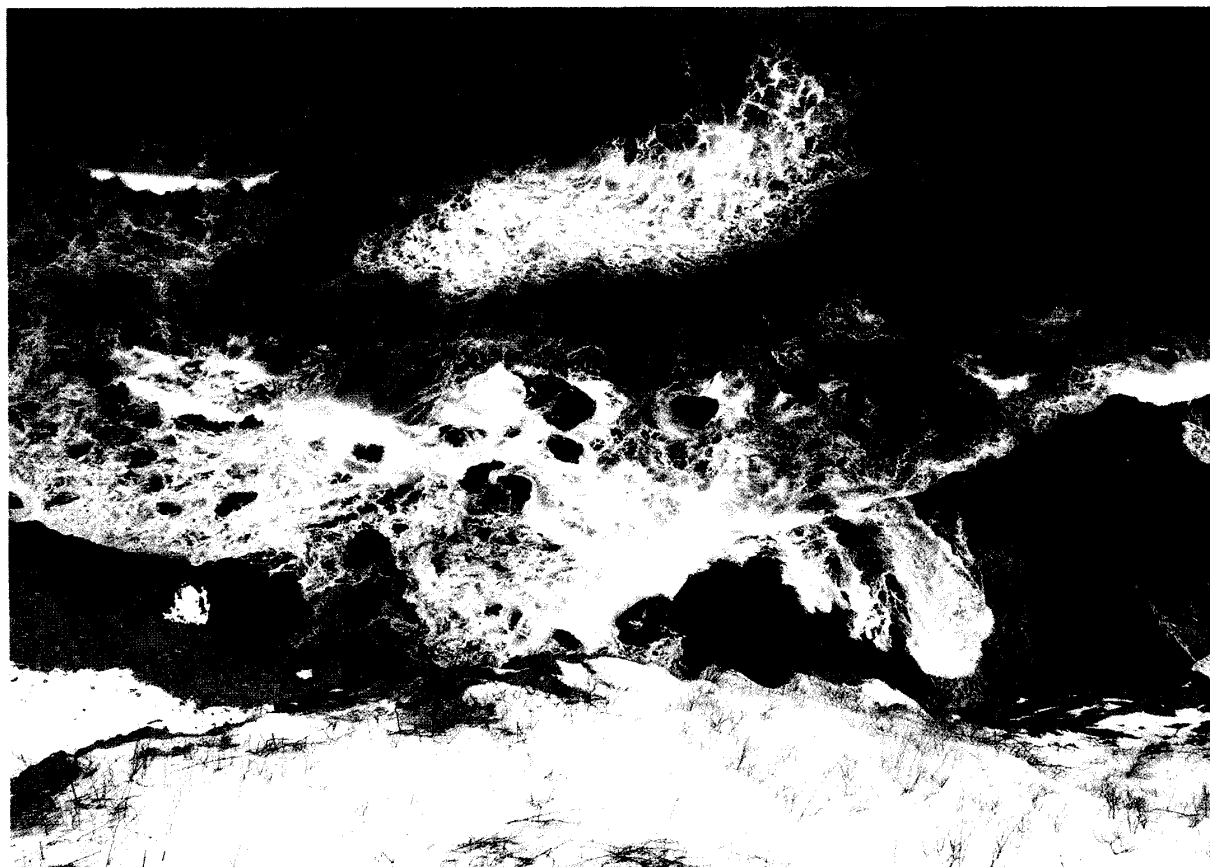
Late Winter through Spring until Summer (Photograph)

藤 原 等

FUJIWARA, Hitoshi

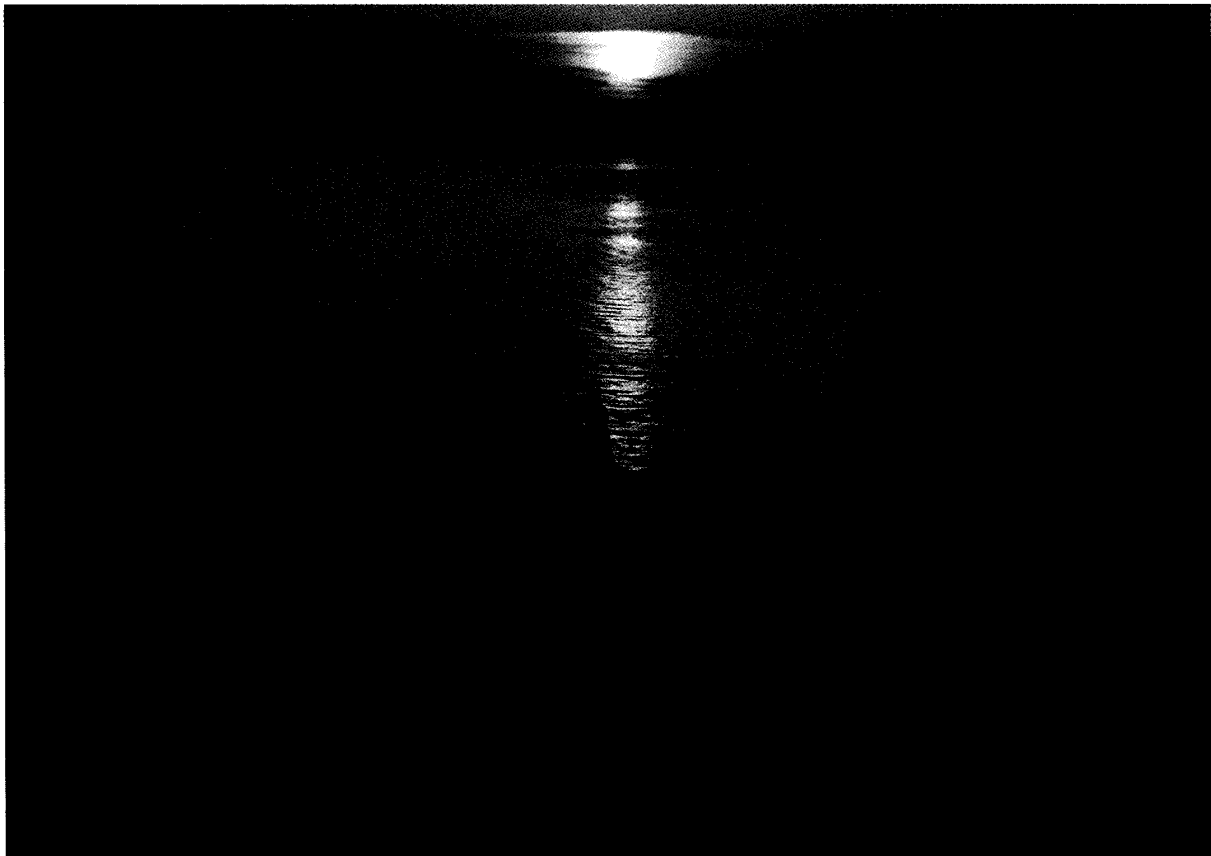




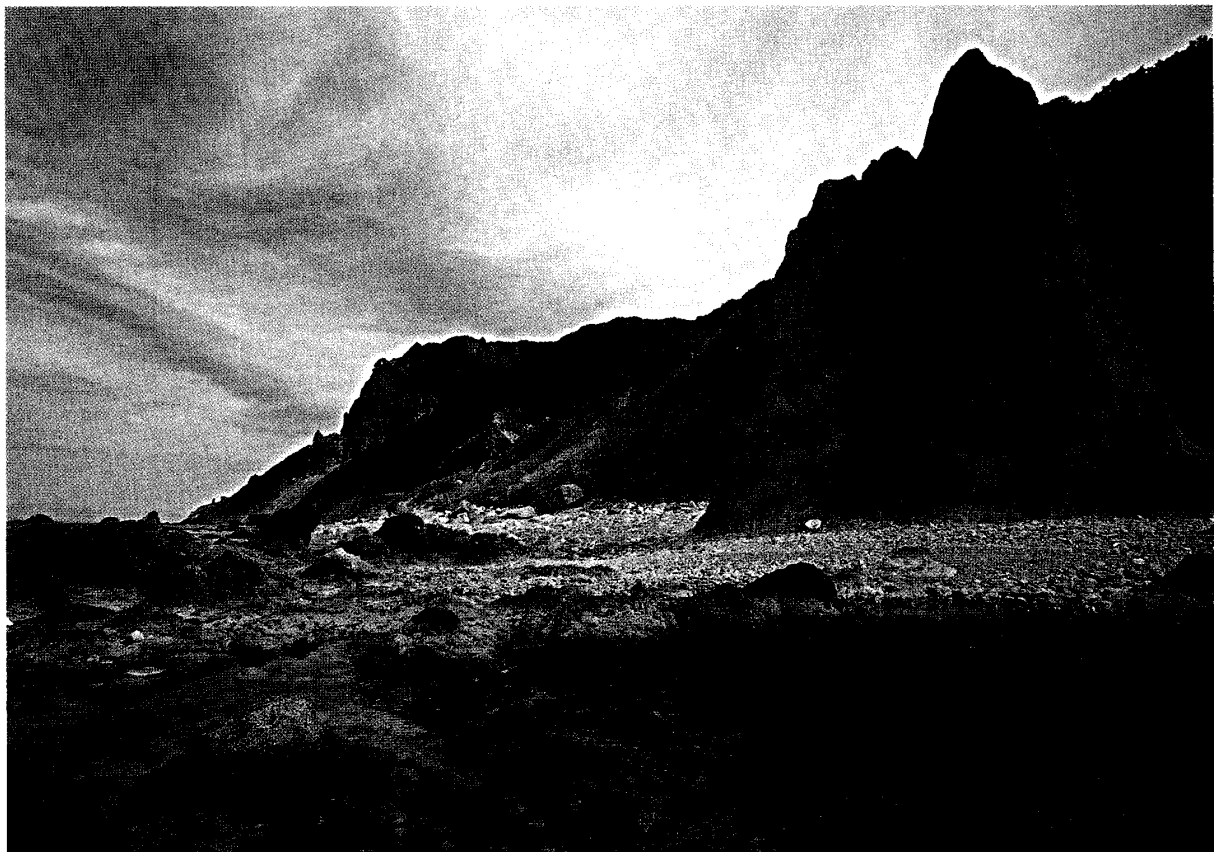




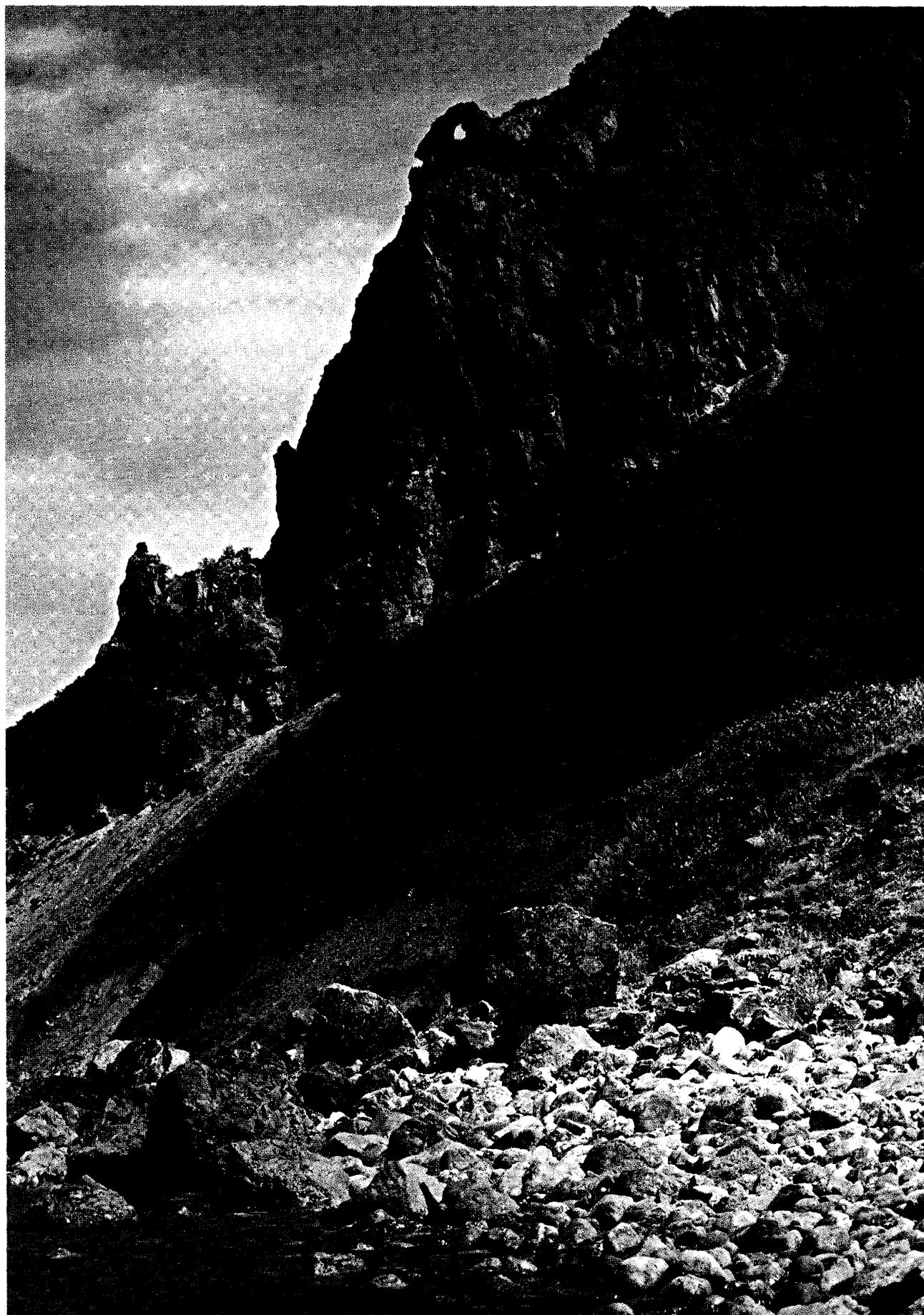


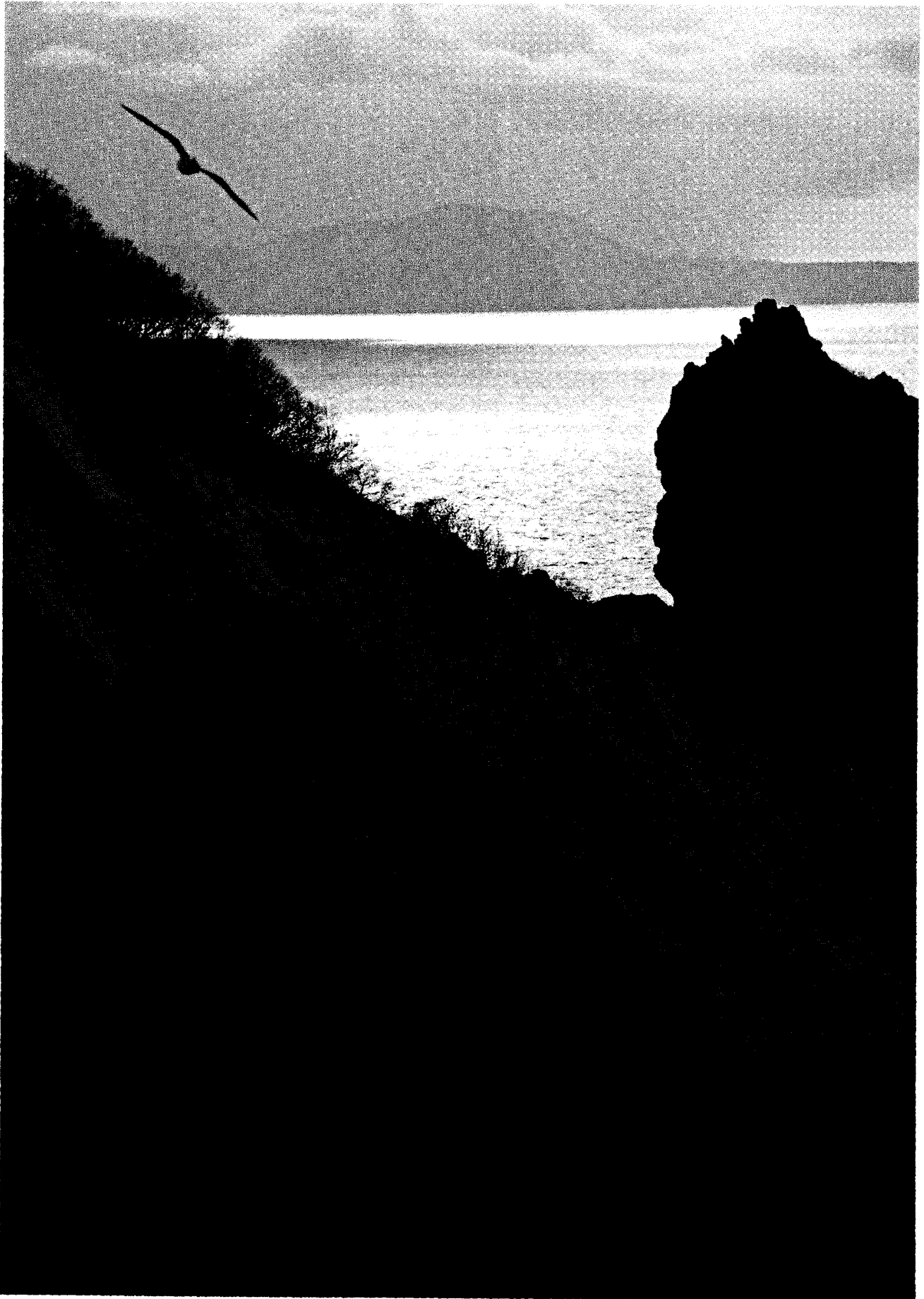












確かにそれはその通りのような気がする。沖縄の気温が大阪に来、東京に来たというのだ。6月の夏至の日に日本海に落ちていく太陽を、今年も、撮影しそびれて、ボクの住み処に林立するようになった高層建築物の邪魔者を、どう始末をつけるのかが課題であって、始末をする思案を真面目に考えていないものだから、時間ばかりが経過して、ただただ茫然と落日を見つめていた。7月になれば、何とか料理できるのではないかと甘く見ていたら、梅雨のような状態になってしまい撮影のチャンスに恵まれなかった。東北地方が北海道になったように思われる。かつてないほどの猛暑に見舞われとうとう我慢できずエアコンを買ってしまった。残雪というのか、冬の終わりというべきなのか、オコタンペ湖の近くを走っていた3月には、このような猛暑は予想もしていなかった。あっという間に、蕾がふくらみ、花が咲き、今まで見たことがないような数の花が咲き、あっという間に落花して結実してしまった。アジサイの花、アカシヤの花、野生のエニシダの花など、こんなに咲いてよいものかと、ボクはまだ一度も見たことがないような数の花をつけたのであった。養蜂業者もあわてたそうだが、それが瞬間的に落花してしまった。運動神経の弱いボクはまたまた、春と夏を撮りにがしてしまった。

そして8月の終わりに稲刈りをしているのだ。8月になって小樽海岸の岬に立って、落日の日本海をボウッと見ていたら、あのおじさん死ぬんじゃないかと疑われたりして、声をかけてくれたりしたのだが、冗談じゃねえ、死んだふりをして、あの太陽のヤツメ、このフレームの中に切り取ってくれるワと、気取っているだけじゃないかって、説明しようと思ったものの面倒くさいのでやめてしまった。失礼してしまった。草間彌生さんを見た。札幌芸術の森に出かけたのだ。水玉模様に赤なんて、フザケルンじゃないと言いたいところではあったが、30年前の草間さんと変わるところのないパワーに圧倒された。草間さんの混沌が錯視の世界で今年の夏札幌芸術の森を彩っても、発病以来带状疱疹後神経痛は1秒の休みもボクには与えてくれなかった。痛い、痛いといっても、人間の証明は歩みを続けることを止めてはいけない。自分の内奥にある意志と邪悪との闘いなのであるから。冬の終わりから春へ、そして夏へ、今年の桜は、ボクには美しくはなかった。今年の新緑は美しさを見せてくれたのに、どうしたことだろうか。北海道の淡白な桜の花を見て、感じない、感性は異常を来している。完全にやられてしまったのだろうか。そうではないと思いたいに違いない。8月3日、アンリ・カルティエ＝ブレッソンが95歳で亡くなった。1952年の写真集「決定的瞬間」はボクにとっては辞書のようなものであった。土門拳が絶対非演出の決定的瞬間を主張したが、2004年、あらためて絶対非演出の「決定的瞬間」を考えたいと思った。95歳までボクが写真を撮るとして、例え風景が被写体になったとしても絶対非演出の決定的瞬間でいけるのかどうか。絶対非演出とは何者なのであろうか。今年になってあえて撮影機材を重いものに変えてみている。背中も、両手首も、筋肉痛でパンパンに張っているが写真はスポーツかもしれない。労働には違いがないのだが、杉尾風画君や杉尾碧馬君という人たちは、2歳児なのにファインダーを覗いてシャッターを切っているのだ。ブレッソンは、21世紀に驚くべき映像の時代、視覚の時代としてバトンタッチしてくれたのだと思っている。心から写真を撮りたいと思っている。(2004年8月30日記)。